

安倍能成の自己成型

— 京城帝国大学教授になるまで —

中根隆行*

nakkun99@hotmail.com

Contents

1. 敗戦の後に
2. 明治の松山
3. 幼年時代と漢学の素養
4. 小国民の愛国心
5. 上京後の安倍能成
6. 終わりに

Abstract

敗戦後の日本でオールド・リベラリストとして知られた安倍能成。戦前、彼は京城帝国大学教授として15年余りの朝鮮経験をもつ朝鮮通の知識人でもあった。彼は第一高等学校から東京帝国大学へと進み、夏目漱石門下の気鋭の文芸評論家として自然主義文芸思潮が主導していた明治末に文学領域に登場する。その後はいわゆる「大正教養主義」をリードした知識人として知られている。安倍能成の朝鮮観については、以前から「植民者」という評価をもって批判されることが多かった。植民地の帝国大学教授という地位を考慮するならば、そのような評価が揺るぎないものとしてあるというのも妥当であろう。しかし、安倍能成が「植民者」であるという評価は、彼がどのような思想形成を経てそうなったのかという問題を看過する傾向がある。彼は四国の松山生まれ、第一高等学校から東京帝国大学を経て、京城帝国大学教授や第一高等学校校長、そして敗戦後には幣原喜重郎内閣の文部大臣を務めるなど、いわば近代日本の学歴エリートのトップ・ランナーでもあった人物である。このような道程から考えても、現在、安倍能成という人物を問い直す必要がある。つまり、彼の思想形成は、近代日本の知識人のひとつの典型的な道程でもあるということである。以上の観点から、本稿ではこれまであまり注目されなかった安倍能成の少年期の思想形成に注目し、その思想形成とやがて浮上する植民地の問題がいかに関わり合うことになるのかを考える契機としたい。

Key Words : 安倍能成、京城帝国大学、大正教養主義、松山、学歴エリート、近代教育制度

* 愛媛大学 法文学部 助教授。

1. 敗戦の後に

1961年6月11日、東京は虎ノ門にある共済会館において、とある旧帝国大学の同窓会が開催されている。「初夏の薫風もこの頃では肌に汗する位の高温である。つぎつぎと参集するなつかしい顔々である、肩をたたき合つて久闊を叙しあい、しばらく談笑がそこへに起っている」。午後2時に総会は始まり、開会の挨拶を経て、その当時学習院大学院長であった安倍能成が恩師代表として挨拶に立った。その際のスピーチは「今日の出席の状態をみると、卒業生諸君よりも先生の方が定刻に参っているのは一寸理解に苦しむ。民主々義というのが時間を正確に守ることが民主々義のイロハではないか、自分よりは半分以上も若い諸兄は我々よりもはるかにより民主々義的であるべきである」と説教めいた文句に始まり、「しかし、この会はかくも盛大なのは、諸君が苦難を克服する実力を持って今日の状態を築かれたからと思う。今後一層の健闘を祈る」と締め括られている。¹⁾

写真入りでその模様を伝える紹介記事には、「美しい銀髪をなびかせて恩情溢るスピーチに、一同一瞬、東崇町の教室にあるおもいでロマンスグレーや一部退却型の頭を下げて謹聴した」と記されている。参席した諸氏が恩師の挨拶を「東崇町の教室」にあるかのごとく拝聴したというその光景は、京城帝国大学同窓会第8回総会での出来事である。旧京城帝国大学校舎は、ソウルの東北部にあった「東崇町」の大学通りに位置しており、アカシア並木がそよぐ大学通りの東側には京城帝大の本部校舎や図書館とともに安倍能成が所属していた法文学部校舎が、西側には医学部校舎や附属病院があった。

1945年の敗戦から16年を経た京城帝大同窓会での一場面は、会報『紺碧』という小冊子に掲載されている。現在、その他の旧帝国大学の同窓会誌等に比較して、敗戦をもって閉鎖された植民地における帝国大学のこうした会報類の全貌を知ることは難しい。しかし、断片的にはあれ、そこに窺うことができるの

1) 上記の引用は無記名「京城帝国大学同窓会第8回総会特集並昭和36年度春季大会」(京城帝国大学同窓会編『紺碧』第22号、1961年10月、p.6)による。字句に不適切な部分もあるが原文のまま引用してある。

は、植民地統治期に京城帝大で学んだ学生らの記憶とともに、のちに彼らがその朝鮮生活をいかに位置づけ、それからどのような道を歩んできたかといったことである。たとえばそれは、同窓会の席上で安倍能成が教え子らに語りかけた「苦難を克服する実力」という言葉に表れている。

この「苦難」の「克服」とは戦中期を経た敗戦後の混乱における「苦難」とその「克服」を指していると考えてよい。そこには敗戦によって母校がなくなり、また植民地統治の歴史から朝鮮時代の思い出を語ることに後ろめたい感情が付き纏うという戦後日本の状況があった。加えて、日本が敗戦を迎える時期に朝鮮にいた京城帝大の在學生や卒業生らは、周知のとおり朝鮮半島からの引揚経験をもち、その後もGHQ占領期における辛酸をなめた者が多かった。京城帝大の同窓会会報『紺碧』にはそうした敗戦後の京城帝大の同窓生の消息記事や韓国人卒業生らによる韓国便りといった記事も散見される。²⁾そのような「苦難」の「克服」の道程が、それを経た彼ら教官や同窓生らの絆を以前にもまして固く結びついたと考えられる。

もうひとつのエピソードを挙げよう。京城帝国大学退任後、安倍能成は第一高等学校校長を務め、軍部の圧力に対抗するなどした名校長と謳われている。そのような経緯から敗戦後の1946年1月には幣原喜重郎内閣の文部大臣に就任し、戦後の教育改革に尽力することになるのだが、就任後まもない2月、安倍能成はGHQの招請に応じて来日したアメリカ教育使節団を前にして次のような演説を行っている。

御察しの如く、戦敗国たり戦敗国民たることは苦しい試練であり、困難な課題であります。同時に敢て失礼を申せば、よき戦勝国たり戦勝国民たることも中々困難であります。我々は戦敗国として卑屈ならざらんことを欲すると共に、貴国が戦勝国として無用に驕傲ならざるを信ずる者であります。さうして諸君の来朝が我々の上の願を充たす最上の機会とならんことを切念するものであります。³⁾

2) 安藤秀一「海外での城大関係者」(『紺碧』第22号、1961年10月。p.2)や金晟鎮「京城便り」(『紺碧』第21号、1960年10月。p.3)など。

3) 安倍能成『戦中戦後』白晝書院、1946年。p.222

この安倍能成の演説は当時の新聞で大きく報道され、多くの人々の賛同を集めた名演説として知られている。「勝つた連合国に対して武力なき日本は唯屈服してその命ずる所に従ふ外はないといふ考え方が浸透していた敗戦後の日本において、「戦敗国」の文部大臣が「戦勝国」に対して「貴国が戦勝国として無用に驕傲ならざる」ようにと主張すること。その歯に衣着せぬ物言いが好評を博したのである。この演説で彼が強調しているのは“*Might is right*”という考え方である。つまり、「力は正義なり」の論理を教育改革においても押しつけようとするアメリカ側に対する未然の批判である。安倍能成の言葉を使えば「勝てば官軍、負ければこれ賊」という論調に苦言を呈したということになる。

敗戦後の「苦難」とその「克服」にせよ、あるいは“*Might is right*”にせよ、彼の主張の根幹にあるのはアメリカを中心とする連合国との戦争に敗れたという意識であり、そこで忘却されているのは、アジア周辺地域への植民地統治や侵略戦争に対する歴史認識であることはいままでもない。⁴⁾敗戦後の安倍能成の場合も、朝鮮に関する言及はあまり残されていないのだ。この歴史認識の忘却については別稿を用意しているので、ここではひとまず措く。本稿では、京城帝大での教え子らに語った「苦難」の「克服」や、アメリカ教育使節団に対する演説で“*Might is right*”という論理への未然の批判となって現れている、被害者あるいは敗者としての心性とその態度表明が、敗戦後における安倍能成にとっては反復された可能性が高いという点を検証する。

安倍能成が京城帝国大学教授の職を辞し、第一高等学校校長に就任するために朝鮮から去ったのは1940(昭和15)年のことである。彼は引揚げを経験したわけでもないし、また京城帝大教授から第一高等学校校長への転任は、日中戦争勃発後の朝鮮総督府の施政などに対する反発もあったにせよ、形式上は栄転であり朝鮮からの逃避であるとも考えられる。その能成が前述の京城帝大同窓会においてかつての教え子らの現在を「苦難を克服する実力」という言葉で位置づける。そこには戦前・戦中期を経た敗戦後の日本の知識人に特有の心性の編制が確かに認められるだろう。しかし、彼がいかなる思想形成を経て京城帝国

4) これについては拙稿「安倍能成と京城帝国大学」(『朱夏』第21号、2006年8月)を参照していただきたい。

大学教授となったのかという点は、これまで必要以上に軽視されてきたのではなかろうか。

本稿が射程を据えるのは、15年余りにわたって京城帝国大学教授の職にあった安倍能成の少年期である。彼のそれまでの半生を踏まえて考えるならば、敗戦後の「苦難」とその「克服」や“*Might is right*”という比喩は重要なキーワードとなる。彼は1883年に松山・小唐人町に生まれている。実家は町医者であり、少年時代はあまり裕福ではなかったものの、一応は旧士族の家柄であった。「松山の神童」と言われた能成は、松山中学校を卒業後、一年余りを経て第一高等学校に進学するため上京する。このようにみるといかにも明治の学歴エリートという感じだが、旧松山藩は佐幕派であり、薩長中心の藩閥政府が成立した明治の世になると、松山出身者が立身出世を果たすには軍人か教師になるかの選択しかないと言われた時代が到来する。すなわち、安倍能成は、司馬遼太郎が描いた『坂の上の雲』の世界よろしく、「勝てば官軍、負くればこれ賊」の謂いを身にしみて感じる世代に属しているのである。この点からいえば、敗戦後のGHQ占領期はいわば第二の「苦難」とその「克服」の時代といってもよいのだ。

2. 明治の松山

伊予の国松山は、温暖な気候に恵まれた瀬戸内の海上交通の要衝として古来から栄えた地方都市である。町の中心に位置する勝山には松山城がそびえている。「松山や秋より高き天守閣」(「寒山落木」と正岡子規が詠んだその城は、加藤嘉明が1602年から25年の歳月をかけて築城した連立式平山城として知られる。嘉明は賤ヶ岳の合戦で有名な七本槍の一人、また文禄・慶長の役の豊臣水軍の将として知られ、名将・李舜臣が率いる朝鮮水軍に辛酸をなめた戦国武将でもある。松山は、その後蒲生忠知を経て、伊勢桑名から転封となった松平定行が領主になる。以来、久松松平氏の領地であった。

江戸時代、松山藩で武芸のひとつとして重んじられたのは水泳である。それは古式泳法大洲神伝流と呼ばれた。町には「御囲い」と呼ばれた藩の水練場があり、明治維新のときにはいったん廃止されたものの、有志によって私設水練場として再興され、夏になると腕白な青少年たちであふれた。その御囲いの大将格であった水野広徳は、若き日の安倍能成や片山伸(天弦)もそこにいたと回想している。中学生になってやっと水泳を習い始めたという彼自身は、御囲いに行くことを父に禁止されていたものの、時々隠れて通っていたと語っている。勉強がよくでき、「松山の神童」と謳われた能成だったが、運動はあまり得意ではなく、はにかみ屋で目立つことが嫌いな少年だった。いまから100年以上も前のことである。

ちょうどその頃、やがて漱石と名乗る夏目金之助が松山にやって来る。漱石は1892(明治25)年と95年にこの地を訪れている。最初は夏に帰省した正岡子規を訪ねての旅行で、高浜清(虚子)にも初めて出会っている。二度目は松山中学校の前身・愛媛県尋常中学校の英語教員としての赴任であった。この一年間の経験をもとにしたのが江戸っ子で無鉄砲な新米の数学教師と生徒たちとの間で繰り広げられる青春小説『坊っちゃん』である。物語のなかで坊っちゃんが最初に降り立つのは三津浜、時は日露戦争直後の1906(明治38)年9月のこととされる。

ぶうと云つて汽船がとまると、舳が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真っ裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蛮な所だ。尤も此熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めて居ても眼がくらむ。事務員に聞いてみるとおれは此所へ降りるのださうだ。見た所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしてゐらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。⁵⁾

坊っちゃんは「元は旗本」という旧士族出身である。「真っ裸に赤ふんどし」という船頭の姿は、この東京から来た青年教師にとって直ちにその地を「野蛮な

5) 夏目漱石「坊っちゃん」『漱石全集』第2巻、岩波書店、1992年、p.261

所だ」と決めつけるいわば植民地主義的な認識に繋がる。素っ裸の船頭も中学校で教えることになる腕白な生徒たちも、坊っちゃんにとってはそういう存在であったのだ。こうした偏見があたかも自然にまかりとおるほど、帝都・東京と四国・松山の差は大きかった。『坊っちゃん』の着想のもとになる経験を得た日清戦争期やこの小説が発表される日露戦争期という時代においては、〈文明／野蛮〉という構図は、〈宗主国／植民地〉という国家型モデルのみならず、〈中央／地方〉といった地域モデル等にも敷衍的に使用された構図として流布されていたのだ。だが、松山出身者からすれば故郷が小説の舞台になるのは光栄だが、のっけから「野蛮な所」と書かれてはたまったものではない。水野広徳は「もし筆の悪戯者たる漱石先生と、体の悪戯者たる僕とが、時を同じうして学校に居たなら、『坊っちゃん』の内容は恐らく多少の変化を見たであろう」と手厳しく批判している。⁶⁾ この水野の少年時代は血気盛んなガキ大将そのものであり、中学校では、夏目金之助が赴任する数年前に学校騒動を起こして校長を退陣させた経験もある。

もちろん、夏目漱石にとって畏友・正岡子規の生まれ故郷はそれほど単純な場所ではなかったが、坊っちゃんに「野蛮な所だ」と言わしめた明治の松山は、皮肉なことに軍人や文化人を中心に各界で活躍する人物を輩出した人材の宝庫でもあった。安倍能成より8歳年上の水野広徳は三津浜生まれ、日露戦争のおり日本海海戦で第41号水雷艇長として活躍、その後『此一戦』を上梓して名を馳せた作家である。また、『此一戦』とともに明治戦争文学の最高傑作と並び称された『肉弾』の作者・桜井忠温も松山出身であり、中学校では漱石に英語を習った教え子の一人である。陸軍士官学校を出た桜井は日露戦争のときに小隊長として従軍、旅順で瀕死の重傷を負って奇跡的に生還する。いったんは火葬場に運ばれたものの、そこで息を吹き返したと言われる。その経験をもとにした『肉弾』は明治天皇の天覧の称号を得て、世界15カ国で翻訳された。その当時、ドイツのヴィルヘルム2世やアメリカのシオダー・ローズベルト大統領も絶賛したという世界的なベストセラーとなる。

6) 水野広徳『反骨の軍人・水野広徳』経済往来社、1978年、p.206

この二人の先輩格といえば司馬遼太郎が『坂の上の雲』で描いた秋山好古・真之兄弟がいる。騎兵戦術に優れた兄・好古は日露戦争で騎兵戦術を駆使してロシアのコサック騎兵と戦い、弟・真之も東郷平八郎の名参謀として日本海海戦の作戦を練り、ロシアのバルチック艦隊を撃破する。真之は、日本海海戦のあの電文「本日天候晴朗なれども波高し」の起草者である。そこに写生主義を唱え短歌革新運動を推進した正岡子規が加わる。海軍兵学校を首席で卒業した真之だが、彼と子規そして漱石は東京大学予備門の同級生でもある。俳諧では高浜虚子を筆頭に河東碧梧桐や寒川鼠骨が子規に続いた。『坊っちゃん』の愛媛弁を添削し『ホトトギス』に掲載したのは虚子であり、のちに安倍能成が漱石山房を訪れるようになるのも、虚子が彼に下掛宝生流の宝生新を紹介したことが契機となるのだ。

このように明治の松山から多くの人材が輩出されたのは、四国における地方文化のひとつの拠点として栄えた伝統が受け継がれてきたからでもあるが、より適切な理由は幕末・維新の動乱のなかに求められる。久松松平家は三葉葵の紋を許された溜間詰の大名で、松山藩は徳川幕府の有力な親藩であった。四国の南に土佐、瀬戸内を隔てた向こうには長州が控えていた伊予の諸藩のなかで佐幕派を堅持したのは松山藩だけであった。長州征伐では幕府側の先鋒として出兵。だが、第2次長州征伐では苦渋を舐めることになる。さらに大政奉還後の鳥羽伏見の戦いでは朝敵として追討令が出され、戦わずして恭順の意を示したのである。その結果、城は土佐藩によって接收され、たび重なる出兵で財政難に陥っていた松山藩は、さらに15万両にもものぼる上納金を背負わされることになる。明治の世は、このような苦境を余儀なくされた果てに訪れた転機であった。

維新後、松山の人々は教育に力を注いだ。敵対していた薩長を主軸とした藩閥政府の時代になり、家禄を失った旧士族層を中心に立身出世を成し遂げるには教育しかないと考えたのである。そもそも教育にはとても熱心という旧藩以来の伝統があった。幕末期、伊予の寺子屋は千を数え、松山では漢学塾が凌ぎを削っていた。その中心を担ったのが1827(文政3)年に創立された藩校・明教館である。この明教館は、松山県学校、県立英学所などを経て、のちの松山中学校の礎となる。また、「学制」の発布とともに小学校が相次いで創立され、師範学

校の前身である正則伝習所や各英語学校、女学校なども陸続と誕生している。いまでこそ夏目漱石がやって来た松山中学校というのが有名だが、維新後の英語学校では慶応義塾を出た福沢諭吉の門下生が教壇に立ち、そのほかの上級の学校でも他所から新しい学問を講ずる気鋭の教師を招聘した。そして、教育を受けた土地の青年たちは、立身出世をめざし、故郷を離れ遊学したのである。そんな風土のもとで安倍能成は生まれている。

3. 幼年時代と漢学の素養

1883(明治16)年、安倍能成は、年の瀬の追い迫った師走の23日に小唐人町で生まれた。父の安倍義任は通称大街道と呼ばれていたこの町で蘭方医をしていた。安倍家の初代は能成の祖父にあたる允任、松山で種痘の開祖と言われた人物であった。父は尾道の人で旧姓藤井頼三、18歳のときに允任に師事し、そののち養子になった。母の品は後妻で、義任は先妻との間に五人、品との間に九人の子をもうけている。能成はその八男にあたる。十男四女の兄弟姉妹といえは驚くよりほかないが、それは今日の感覚にすぎない。能成が生まれたとき、兄姉九人の内五人は幼くして死没していた。父は養子で母は後妻、長兄との年の差は18歳である。物心がついたとき、祖父は他界し、異腹の兄たちは家を出ていたが、複雑な家庭環境が少年時代の能成に与えた影響は大きかったと思われる。

祖父がまだ健在の頃、父との間の不協和音は、腹違いの二人の兄への接し方の違いとなって現れた。祖父は長男の任重を、父は次男の任道を偏愛したのである。医学の道に進ませ、家業を継がせようとしたものの、結果として二人に対する教育は失敗する。兄たちは家に寄りつかなくなり、それが後妻である母を攻撃する新聞種にもなったという。その名誉挽回のためであろうか、父は七男の栄と能成の教育に力を注ぐことになる。

七男の栄はそうではなかったが、能成は幼稚園に通っている。寺子屋という

庶民教育の伝統を有するこの国にあって、エリートの子弟教育に始まる幼稚園の歴史も明治初期に遡る。その波が地方に広がったのがちょうどこの頃であった。もちろん昔ながらの寺子屋式の教育も行われていた。安倍家のあった大街道には近藤元修という人が開いていた漢学塾があり、明け方になると素読を受けに行く子どもたちの下駄の音が能成の寝床まで響いたという。彼自身はというと、幼稚園に通い始めた頃から、父に漢籍の素読と手習いを教わっている。

父の義任は、14歳のときに大阪へ出て漢蘭折衷の内科医林東庵のもとに入門し、医学の道に進んだ。その後兵庫で真島順庵という漢方内科医に弟子入りしたものの、小瘡を患って郷里にて静養。治癒したのち、長門藩の青木周弼に師事し西洋医学を学んだ。山口では翻訳書とともに原書研究にも励み、志半ばで頓挫したが江戸への遊学もめざした人物で、吉田松陰のように海外渡航を企てようとしたこともあったらしい。幕末に青年時代を過ごした父は、「日本外史」などで勤皇思想に影響を与えた同郷の賢人・頼山陽を尊敬し、「孟子」に最も親しんだ人であった。

そんな父が漢籍の素読や書写、手習いを仕込んだ。彼には漢籍の要点を押さえて教える力がそれほどなかったと安倍能成は語っているが、幼稚園から中学に入る頃までに読まされた漢籍は、「大学」「中庸」「論語」「孟子」の四書に五経の一部、「古文真宝」「文章軌範」「続文章軌範」に「十八史略」「唐宋八大家文」を加え、日本漢文では「先哲叢談」「日本外史」「日本政記」その他に及んでいる。常々父は頼山陽の「日本政記」が孟子の思想に貫かれていることを説き、知の骨格は漢籍で作っておかねばならぬと諭したという。家の本箱には、日頃から尊敬していた儒学者・大原観山から買い取った朱子の「四書大全」などが西洋の医学書や解剖図とともにところ狭しと納められており、能成らは毎年夏になると書籍を二階に運んで虫干しにした。大原観山は断髪令が出された後もちょんまげを貫いた気骨の学者であった。漢学の素養をもつ人に畏敬の念を抱き、漢籍がまだ生活のなかにしっかりと根づいていた時代だった。いわばそんな時代の黄昏を生きたのが安倍能成の世代である。大原観山の孫にあたる正岡子規は、漢学や書道教育に対する転換をこう語っている。

書生の発達進歩の景況を見るに新しき時代の書生程学力も進歩し智識も増進することおびたゞしけれども只劣るものは漢学の力と漢字を書くこと也昔の小供は読書をするよりは手習の方を専一とせし故従て拙筆といへども可なりに上手なりき余より六七歳長ずる年輩の者は総て漢字を書くこと巧なり余より四五歳少き者はまた余等同年輩ものより下手也⁷⁾

日本における近代の学校教育制度は、1872(明治5)年に明治政府が発布した「学制」に始まる。「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」と記されるこの学制によって、国民のすべてが小学校に就学することが定められた。1867(慶応3)年に生まれた正岡子規は、この年に叔父から手習いを習い始め、祖父の観山の私塾へと通い始めた翌年には小学校に入学する。学制の発布後、わずか数年の間に2万校以上の小学校が全国に設立され、児童の就学率は4割に達する勢いであった。小学校で使用された教科書はまだ民間による出版物が中心で、福沢諭吉など文明開化を代表する著作が多く採用され、寺子屋で教えられていた漢籍は除外された。

子規と同世代の者を基点に10年という短いスパンで区切ってみても、手習いの習熟度を示す漢字の巧拙は歴然としていた。たとえば、子規より「六七歳長ずる年輩の者」といえば坪内逍遙や森鷗外らがあり、同世代には幸田露伴や夏目漱石、「四五歳少き者」としては島崎藤村や泉鏡花に松山出身の河東碧梧桐。安倍能成は16歳下となる。「新しき時代の書生」とは、新教育が普及したのちの能成らの世代の若者を指すとも考えよい。子規も能成も漢学到手習いという従来の教育と学校での新教育をともに受けた。けれども、そこには世代という決定的な差があったのだ。

少年の頃からして強制的にでも反復読まされた漢籍が、私の頭脳や心臓に多少とも染みこんで居ることは否定されない。今もその文句を所々覚えて居て、数十年前も前の食物を反芻するやうな気持で、ふとした機会にそれを味ひ返すこともある。中学時代の末や高等学校時代には、かうした教育に対する反感のみが頭をもたげて、かなりの情熱を以てそれを否定し去らうとしたが、今になつて考へれば、

7) 正岡子規「筆任勢」『子規全集』第10巻、講談社、1975年。pp.314~5

それは害と共に益をも、又幾分かの栄養をも私に与へて居たのである。⁸⁾

父に強いられながら何度も読まされた漢籍。そうした教育に安倍能成は反感を抱いた。新旧の教育の衝突は、安倍家では父と子の関係に準えることができる。能成の家は町医者であったが、有り体にいえば地方の素封家であった。母の品は旧松山藩土堤方儀の娘、俸禄四百石近くであった。祖父の代に士族医師となった安倍家は禄高12石2人扶持にすぎない。父は景気よかったときに小さな斜陽族から母を娶ったのであろうと能成は述べており、蘭方医であった安倍家は幕末・明治初期の松山ではまだ珍しくそれ相応に裕福だった。病家であった大原家から高価な漢籍を購入したりしていたことから、それは察せられる。しかし、その後、父が50歳を過ぎたあたりから家業は廃業も同然となり、窮に貧するようになる。それでも父は、家計を立て直す努力はあまりせず、漢籍を読んだり、手習いをしたりする毎日続けた。そして、そこから得た知識を糧に息子を教育したのである。当然のことながら、能成はそんな父親や家というものに不信感を持つことになる。

4. 小国民の愛国心

古き時代の教育の象徴であった漢学は、アマチュアでありながらも息子の前では漢学者気取りの父親の姿に重なるものであったのかもしれない。過ぎし日々を思い出し、漢籍漢文に勤しんだことは有益だったと回想してはみても、当時はそんな教育への不満が鬱積していたというのだから、安倍能成の反感は並々ならぬものだったに違いない。もとよりその反感は子どもなりの葛藤を生み出したはずであり、そうである限りにおいて、旧来の教育とは別の、しかも少年の心を捉えて離さないような何かもあったと思われる。たとえば、それは新しい文物に対する好奇心や知識欲というようなかたちをとり、日本が近代国家の後

8) 安倍能成「少年時代の読物」『安倍能成選集』第1巻〔復刻版〕、日本図書センター、1997年、p.246

発国として徐々に台頭する道程を、子どもなりに見つめるなかで芽生えてくる自我というものを形作っていく。

明治政府は、欧米列強による植民地化への脅威から、日本をアジアの独立国家として維持するために人材の育成を掲げ教育の普及に努めてきた。だが、文明開化や鹿鳴館という言葉で示されるような西洋化の波が広まり、従来の藩校や寺子屋式の教育によって培われてきた道德規範は軽視されがちであった。そこで表面的な西洋一辺倒の風潮に警鐘を鳴らし、本来あるべき倫理道德を説くべく1890(明23)年10月には「教育ニ関スル勅語」が出される。安倍能成が外側尋常小学校に入学した年のことである。ちなみにこの時代を俯瞰しておくと、全国的に広がっていた自由民権運動の沈静化を経て、前年の89年には大日本帝国憲法が施行され、教育勅語発布の翌月には第1回帝国議会も召集される。これによってこの国の法的な統治機構がようやく確立されるという時代のことである。

天皇の大権として発せられた教育勅語は、忠君愛国の思想を流布するという点においても、またのちの安倍能成を考える上でも重要である。勅語発布の直前には初代文部大臣となった森有礼によって小学校令が改正され、「修身」教育が重視される。翌年の6月には省令で「小学校祝日大祭日儀式規定」も制定される。ここで取り決められたのは「御真影拝礼」「両陛下の万歳奉祝」「勅語奉読」「校長訓話」「式歌斉唱」といった行事であり、これにより小学生は授業のない祝日にも学校へ登校して天皇と皇后の写真である御真影に拝礼し、教育勅語の奉読や訓話などが慣習づけられたのである。元旦には「御真影拝礼」「万歳奉祝」「式歌斉唱」を実施するという規定もあり、全国の学校には教育勅語の謄本と御真影とが下賜され、大切に保管せよという旨の訓令も出されている。祝祭日や学校行事のときには御真影に拝礼し教育勅語が奉読されるという新たな日常習慣が、これ以降の小学生の生活のなかに組み込まれたのである。

さて、安倍能成の小学校時代に話を戻そう。当時の小学校は尋常・高等の別があり、原則として各々4年間のカリキュラムを経て上級学校に進学するというシステムであった。義務教育は尋常小学校を卒業するまでの3年から4年間とされた。能成の尋常小学校での担任は寒川朝義という。俳人・寒川鼠骨の実兄で

ある。その寒川先生について彼がよく覚えているのは、忍堅蔵の話聞いたときのことだった。忍堅蔵の話というのは川上眉山『宝の山』からとったもので、この冒険小説は博文館の人気叢書「少年文学」シリーズの第六編として刊行されたものであった。博文館の「少年文学」シリーズは、日本最初の本格的な児童文学と評される巖谷小波『こがね丸』の好評によって叢書化されたものであり、能成も『こがね丸』と村井弦斎『近江聖人』を読んでいる。『こがね丸』は、牛の牡丹と文角に育てられた犬の黄金丸が親の悲劇を知り、武者修行で腕を磨き父犬の復讐を遂げるといふ物語。また、母子の別れの場面で有名な『近江聖人』は、修身の教科書に掲載され、能成にも近い谷崎潤一郎や和辻哲郎らも愛読しており、その頃の青少年に大きな影響を与えたもののひとつであった。

児童向けの読み物といえば、小学校に入学した頃から安倍能成は『少年園』や『幼年雑誌』とともに三大児童雑誌と評される『小国民』を購読している。父が兄の栄と能成のためにとってくれたのだ。東京の学齡館から発行されていたこの雑誌は、『明治事物起源』で知られる博物学者・石井研堂が編集した小学生向け雑誌である。創刊は1889年。のちに雑誌編集に専念する研堂だが創刊当時は小学校の訓導だった。職業柄であろうか、子どもたちの知識欲に訴える平易でしかもおもしろい読み物を研堂は書いた。巖谷小波が児童文学における創作の開拓者なら、研堂は幅広い知識で読者を啓蒙する読み物での開拓者という評もある。

安倍能成が覚えているのは「虫国議会」や「不思議国巡回記」などの読み物である。前者は、帝国議会の開設を背景に昆虫の生態を議会形式で語るといふ内容、後者は、自転車で日本各地を周遊し訪れた土地の風俗を紹介するといふ内容であった。それぞれの趣向をみても、子どもの心を捉えたであろうことは容易に想像できる。もちろん、子どもの嗜好に合わせた読み物をただ掲載しただけではない。『小国民』の編集理念は教育勅語に求められており、発布の際にはその全文が掲載され、それ以後も編集方針は勅語の精神に基づくことが再三強調されている。もとより、その誌名は次世代を担う若き国民という意味であり、創刊号の緒言では「拝啓、我が幼き国民、第二の日本国民たる、幼年諸君」と真正面から読者に語りかけ、あるべき国民であれと諭している。すなわち、子ども

に必要な知識を面白い趣向で提供するとともに、教育勅語の精神をもって彼らをしかるべく啓蒙すること。それが『小国民』のねらいであった。この雑誌を初めて手にしたときのことを、能成はこう回顧している。

私は今日尚『小国民』が初めて町の本屋から届けられた時の夜を想ひ浮べることが出来る。カンテラをつけた行燈の薄暗い火影に顔を寄せて、小さな兄弟が踊る心臓を以てこの雑誌の一枚一枚をめくつた時のことを。

父は小さな活字本は読まないで、夜やはり行燈の影で父の為にかういふ雑誌を読むのが、又私達の務であった。父はその固い頭にも拘はらず、かういふ少年の読物でも何でも喜んで聞いたのは、今から考へてちよつと不思議であつた。[「日本十八勇将」で]その義仲が巴と別れる所であつたかを読んで居る時、私は悲しくなつて思はず嗚咽したことがあつた。⁹⁾

護成社という新聞雑誌店を経由して安倍家に届く『小国民』。能成たちは学校から帰って雑誌を手にするので、それを読むのは夜となる。灯油ランプが入った行燈のもとで嬉々として東京で出された雑誌の誌面を見つめる二人の子どもたち。アメリカの老舗出版社から発行されていた『ハーパーズ・ヤング・ピープル』誌をモデルにただけあって、表紙や口絵、挿絵なども凝っていた。それを見つめる子どもたちの姿は、活版印刷の普及や出版流通網の整備によって可能となった光景でもあった。ときには『小国民』を兄弟で取り合ったり、ときには父のための朗読なのに感極まって泣いてしまったりというエピソードは枚挙にいとまない。能成らにとって『小国民』のような雑誌は知の宝庫であったはずだ。

そして、小学生向け雑誌の雄であった『小国民』もその他のメディアも、日清戦争へと向かうナショナリズム高揚の季節を迎える。戦時の最盛期で15000部という部数を誇ったとされることからわかるように、戦争は雑誌などのメディアを促成させる。もちろん、それはメディアに限らない。メディア報道に一喜一憂する読者は、その熱狂をもってメディアを支える。開戦当時10歳だった安倍

9) 前掲「少年時代の読物」、括弧内は中根による注記。pp.247~8

能成もそのひとりであった。「私が今まで一番熱心に戦争の勝敗を心配したのは日清戦争であり、その意味でこの時分こそ、私が狭い意味で最も熱烈な愛国者であった頃である」。¹⁰⁾その当時のことを能成は、このように回想している。

5. 上京後の安倍能成

日清戦争期に多感な少年時代を送った安倍能成がその頃を回想して「最も熱烈な愛国者であった」と語ること。この少年時代の自己表象は、逆にいえば、のちの彼の道程が「愛国者」から徐々に離れていったことを意味している。安倍能成は、松山中学校を経て1902年9月に第一高等学校に入学する。一高在学中には魚住影雄、阿部次郎、岩波茂雄、小宮豊隆、中勘助らを知る。その翌年5月には、同級の藤村操が「巖頭之感」を残し華巖の滝に投身自殺するという事件が起きる。近代思想史でも個人主義思想への転換をはかった象徴的な出来事だと言われるこの事件に、能成ら一高生も強い影響を受け、彼を筆頭に多くの者が落第することになるが、その翌年に能成は校友会の文芸部委員となり、徐々に校内で人望を集めていく。

当時の一高では国家主義を基にした籠城主義、つまり蛮カラ風のエリート主義が支配的であったのだが、日露戦争前夜であるこの頃になると個人主義思想が台頭してくる。当時の一高において個人主義思想を主張する筆頭となったのは魚住影雄であるが、彼とともに文芸部委員となった安倍能成らの校友会雑誌での執筆活動もまた総体として個人主義への傾向を強めていくことになる。この時期の一高には小泉八雲ことラフカディオ・ハーンの後任として夏目金之助が英語を講義していたが、在学中は漱石の影響をあまり受けていない。能成の思想的傾向は松山時代から傾倒していた高山樗牛から綱島梁川へと移ることになる。

一方、日露戦争前夜に世間を騒がせた藤村操の投身自殺は、煩悶青年現象

10) 安倍能成『我が生ひ立ち』岩波書店、1966年、p.59

を引き起こすことになり、日露戦争後の自然主義思想の高潮にも繋がる。しかし、安倍能成の思想形成は、確かに自然主義文芸思潮の影響下にあったし、共感さえも感じてはいたものの、それとは別個の方向へと向かう。この方向性は能成のみに限らず、一高校友会文芸部の周辺にいた者たちの特徴でもあった。逆に、メディアで話題になった煩悶青年や墮落青年と言われる学生層は、恋愛沙汰などでスキャンダルを起こした者たちを指す場合が多く、彼らと区別される。能成らの煩悶は、校風のあり方や立身出世主義に対する疑問、恋愛問題などが理由となるが、やがてそれは「自己」に沈滞し思索に耽ることに向かう。

一高を卒業し東京帝国大学に入学した1906年に、安倍能成は小説「長兄」（1911.4 発表）を書いている。彼の数少ない創作のなかの一篇である。東京帝大時代はラファエル・ケーベルや波多野精一に影響を受けるものの、憂鬱な日々を送った。1907年に宝生流の手習いを始めたのが契機となり、同郷の先輩である高浜虚子経由で夏目漱石とも交わる。東京帝大在籍中に『野尻湖日記』を『ホトトギス』に掲載、網島梁川との共訳で『ルナン氏耶蘇伝』を刊行する。卒業論文は「スピノザの本体論と解脱論」であった。そして、高浜虚子や夏目漱石との交流が機縁となり、大学を卒業する1909年頃から、彼は『ホトトギス』『東京朝日新聞』『国民新聞』などで本格的に文筆活動を始めることになり、次第に文学界で名を知られるようになる。特に自然主義論が多く、同郷の片上天弦との応酬が有名となる。この時期の能成による評論活動のキーワードになるのは「自己」である。たとえば、自然主義文芸思潮の奉ずる「自己」について彼は次のように反駁している。

かゝる自己を以て人生に臨み、現実接する。果してどれだけ人生に触れ得るであらうか。多くの外的経験を重ねることが、人生に触れることならば、詐欺師や泥坊は最も多く人生に触れて居なければならぬ。我等がしみじみと深く人生に触れると感ずることが出来るのは、我等が清新な心持を以て人生に臨む時ではないか。たゞ現実にふれるといふことは、決して人生に触れ人生を深く経験する所以ではない。我等人生に触れたい触れたいといふのはむしろ人生に触れざることを示して居るのではないか。徹底せよといふのはむしろ徹底せざるを証するものではないか。11)

自然主義者のいう「現実」や「自己」とは「与へられたる現実」であり「自己」である。安倍能成は、それに右往左往するよりは、その「自己」を直視していか「人生」に挑むかを考えねばならないと主張したのである。このような主張は、一高時代における個人主義を礎にした煩悶から思索へという流れの延長であり、やがて大正教養主義的な言説へと傾いていく。能成のいう「自己」とは、きわめて積極的な自己形成の主張であるものの、他方では「自己」をとおして現実を批判する自然主義的な方向性を持たず、またその「自己」を与えたものへと向かうこともなかったといえる。

6. 終わりに

1900初年代に学歴エリートの中のトップ・ランナーを走る一高生の間から国家主義や立身出世主義に対する懐疑が生まれ、個人主義が台頭してくる。のちに大正教養主義やオールド・リベラリストと称されるようになる安倍能成の思想の礎もこの時代に形成されたと考えてよい。もとより、こうした思想が台頭する基盤には近代日本の教育制度の確立があった。つまり、社会的経済的に下位におかれた者であっても、学歴を積めば階級的移動が可能となる社会がこの頃には到来していたのである。個人の学力＝実力によって学歴エリートとなった者たちは、そのようにして形作った「自己」を判断基準として既成の社会に異議を申し立てた。能成もまた「自己」を磨き、それを基準にしてものを考えたのである。安倍能成のいう「自己」は教養主義的特徴をもっている。つまり、個人の人格を教養によって高めるということである。大正教養主義が旧制高校を中心とした学歴エリートを対象として広がり、同じく英語のcultureとして大正期に流布した「文化」とは意味が異なっているという事実は、そのことを物語っているとも考えられる。のちにこの大正教養主義の個人主義的な理想主義は、社会性をもち得ないという理由から三木清らによって批判されることになるのは周知の

11) 安倍能成「自己の問題として見たる自然主義的思想」『明治文学全集—明治反自然派文学集2』、筑摩書房、1968年。p.24

とおりである。そして、その頃の安倍能成もまた教養主義の限界を、京城帝国大学において身をもって経験することにもなるのだ。

けれども、安倍能成のいう「自己」の限界は、このときすでに彼自身において表現化されていることに注意すべきである。1911年に阿部次郎、森田草平、小宮豊隆との合著として出版された『影と声』における安倍執筆部分の章題は「雲」であり、彼の論理的な文章とは裏腹に暗い印象も窺えもする。加えて、見逃してはならないのは、彼の場合、教養主義的特徴をもつ「自己」が、幕末維新期の松山における「苦難」とその「克服」の果てに見出されたという点である。冒頭に挙げたアメリカ教育使節団来日の折りの演説での言葉に従えば、それは「負くればこれ賊」におかれた松山出身者の立身出世の道程でもあり、いうなれば安倍能成は、その突破口を知による自己形成に求めたのである。

このような観点からすれば、安倍能成の15年間におよぶのちの京城帝国大学時代は「勝てば官軍」とも称せる側においた時期となる。1924(大正13)年、彼は京城帝国大学の初代総長となる服部宇之吉から朝鮮行きを勧められ、内定後一年余りの洋行を経て、1926年3月に京城帝大に赴任することになる。京城帝大時代の彼の評価は「植民者」にすぎないというものではあるが、そのような評価は今後問い直さなければならないであろう。もとよりそれは、「植民者」という評価の否定ではなく、その内実を綿密に検証するという意味においてである。安倍能成が学歴エリートのトップ・ランナーとして頭角を現す道程は、幕末維新期の故郷松山がおかれた状況を抜きにしては考えられないからである。「負くればこれ賊」におかれた「苦難」を知による自己形成によって「克服」すること。安倍能成がみずから実践したこの道程は、のちに彼が京城帝大その他の教壇で学生らに訴えたことでもあり、いわばそこには近代日本の知識人たちが有する植民地主義的な陥穽が存在するのである。

* 本稿は日本文部科学省平成18年度科学研究費補助金による助成を受けた研究成果の一部である。

참고문헌

- 阿部次郎他(1911)『影と声』, 春陽堂
安倍能成(1913)『予の世界』, 東亜堂書房
_____ (1946)『戦中戦後』, 白日書院 p.222
_____ (1966)『我が生ひ立ち』, 岩波書店 p.59
_____ (1997)『安倍能成選集』全5卷, 日本図書センター, pp.246~248
中根隆行(2006)「安倍能成と京城帝国大学」『朱夏』, 第21号
夏目漱石(1992)「坊っちゃん」『漱石全集』第2卷, 岩波書店
正岡子規(1975)「筆任勢」『子規全集』第10卷, 講談社, pp.314~315
水野広徳(1978)『反骨の軍人・水野広徳』経済往来社, p.206

- ❖ 투고일 : 2006. 12. 31
- ❖ 심사일 : 2007. 1. 25
- ❖ 심사완료일 : 2007. 2. 16